

## 全てをしのび、全てを信じ

コリント 113:1~8

僕は、1976年から東アフリカの地球の裂け目とも呼ばれるリフトバレーに位置する国々で過ごし、悲惨の現実を身近に見、またその匂いを嗅いできた。60年代の独立以来発展に苦闘しながらも、一方で、人が影に付き添われるように、悲惨に付き添われて生きる人たち。内戦、肅清、テロ、で虐殺される人々、夥しい難民、誘拐、人身売買、貧困、飢餓、伝染病、その中で心痛み、魂が砕かれ、希望は失せたと嘆き、うめく人々。エゼキエルはそれらの人々を「枯れた骨」と呼んだ。しかし、その絶望と死の現実の中に取り残された枯れた骨が生き返り、人間として再生し、新しい共同体が形成されるという希望をエゼキエルは語った。その奇跡は、神が命の霊を（それはやがて来るキリストの復活の命の力）を干からびた骨に吹き入れてくださることで起こるのだ、と。そのことを語り、告げ示せ、それがエゼキエルの使命、そしてキリスト者の使命だと、それがこの悲惨が、矛盾が、不合理が、酷さが、醜さが満ちる世界の中で「答えを生きる」ことなのだ。そして、教会を始めた。1997年である。

教会から歩いて10分の所に、キバガレという谷に広がるスラムがあった。そこから子供達が教会にやってきた。彼らの生活も悲惨と呼んでもいい状況だった。穴の空いたトタンの掘立て小屋、雨が降れば着の身着のまま、濡れた土間に身を横たえる、その日食べるものに事欠く、じっと我慢する、物乞いに出かける、盗みに走る子、栄養失調、病気になっても薬を買う余裕などない、上下水道なく、ゴミと汚物が散乱する不衛生な環境、慢性的貧困、暴力、犯罪、性的暴力、育児放棄、家庭内暴力、麻薬、売春、、そんな中を生き延びなくてはならない。否応なく卑怯さ、悪をさらけ出す。自分を守るため、嘘をつく、相手を悪者に仕立て上げる巧妙な言い訳。心にもない愛嬌を振り撒く。計算付くの同情買い、ちょっとした脅し あの手この手の強かさ、人

のいい大人より遥かに人生を知っているような逞しさ、また健気さ。

教会で「君たち一人ひとり大切な、かけがえのない一人、愛されるために生まれてきたんだよ」なんて言われても、「そんなの嘘じゃない」としか言いようのない現実。愛してるなんて言われたこともない、扱われたこともない、愛されているなんて思いもしない。自己評価は低い。生きることってこんなにも大変だと思わされる。水道はある、電気はある、今日食べるものがないということはない、裸足で歩かなくてもいい、一応身の安全は守られている、彼らにとってそんな生活は人生半分以上成功したのと同じだ。

子供は未来の希望だと言われるが彼らを見ていると、もうすでに傷つき、喘いでる未来を見る思いがする。しかしやがて私たちは彼らに自分たちの居場所を譲っていかなければならない。どんな希望が残されているのか。(この中で答えを生きるとはどういうことなのか。)

希望を見い出せる糸口として教育に取り組むことが示された。キリスト教教育活動を通して、枯れた骨が生き返ってくるように、キリストの命の力が彼らに吹き込まれること、自分の足で立ち上がり、他者と人生を分かち合っ共々に生きる共同体を作り上げていくこと、それがコイノニア教育センターの始まりだった。

2003年1月、16人の4歳児を受け入れはじめた教育は徐々に成果を見せ、スラムの中で子供たちは学力、生活態度において輝き始め、小、中学校教育への継続への強い要望が出された。持続可能な教育活動のために必要な施設を確保するために2011年ナイロビ郊外の賃貸施設に引っ越しをし、2016年ようやくナイロビから70キロ離れたマイマヒウに10エーカーの土地を入手、校舎建設を開始し、2020年から授業を開始した。現在マスタープランの三分の一が完成しているが、プロジェクトは継続中。

「貧しい人々はいつもあなた方と共にいる」とのキリストの言葉通り、移転した地域に点在する貧しい家庭の子弟を受け入れ始めた。現在155名在籍、スポンサーの方々による学費支援を受ける生徒が(29名)、

保護者が学費を払う生徒が(16名)。部族や生活背景の違いを持った生徒たちが、一つの教育環境の中で、互いの違いを認め、敬いながら共に学び、生活することで、多様な世界に貢献できる人材として成長してほしいと願っている。

学校のモットーは「それでも人生にイエスと言おう」を掲げている。神に意図された自由な人間として、この世のどんな力、状況の奴隷にならず、代替えの効かない自分の人生の支点を見出し、キリストに似たものへと成長し、他者に仕えて生きることを喜びとするものへと育ててほしいとの願いが込められている。

これは悲願だ。軽々しく叶わない、ちょっとやそっとで達成できない現実の彼方に、いつなし逃げられるかわからない、しかし、決して諦めてはいけない願いだ。短期で成果を測ろうとする現在の傾向にはそぐわない努力だ。しかし私たちを支え、前へ押し出す力となる約束の言葉を私たちは持っている。「愛は全てを忍び、全てを信じ、全てを望み、全てを耐える。愛は決して滅びない」というパウロの言葉だ。

「全てを忍び」とは、ギリシャ語では「覆い隠す、包み込む」を意味する「ステゴウ」という語である。肉体的、精神的弱さ、他者を怒らせ、摩擦を生む性格、態度、悪さを丸ごと受け止め包み込む、まさにキリストが私たちを取り扱ってくださるやり方である。「全てを信じ」とは、望んでいる事柄を確信し、まだ見ていない事実を見ているように確認すること。ジャンクは一人もいない。人は変えられる。<sup>キリストの愛がコイノニアの心で成長することを促す</sup>信じられなければ不安、恐れに囚われる。より早く、より良い結果をとるという経済活動の計算が待てない教育、待てない子育てを生む。信じて、諦めず関わり、掘り出せた一人一人の違う成長の輝きを見いだせることが喜び、感謝だ。「すべてを望み」とは、エーリヒフロムは「望むとは、うずくまった虎のようなもの、まだ生まれてきてはいないモノ、まだ現れてきてはいないもののためにいつも備えができていくということだ」と言った。旧約では「待ち望む」という言葉は「縄や弦が激しく絡みつく」様子を表す動詞に由来する。子供たちからやがて現れ出るであろうものに備え、それに絡みついて、関わってゆくのだ。そして「全てに耐える」。決して諦めないように、崩れ落ちないように下から両手で支える。モーセの手をアロンとフ<sup>ハ</sup>ン<sup>ニ</sup>が支えたように、私たちはキリストの霊に掴まれ、キリストの愛の霊を注がれ子供たちに関わってゆく。

その愛の労苦を続ける中で、子供たちはある日気付く。「私は忘れられていない。諦められてはいない。見捨てられてはいない。大切に思われている。喜ばれている。感謝されている」と。そんな自分は愛されているという自信が彼らを強くし、彼らを変えてゆく。奇跡が起こる。

東日本大震災の時、朝食に揚げパンを買いなさいと母親からもらった5円を「パスター、これ献金に」と言って差し出してくれた。隣の家のために20キロのポリタンクで水運び、調理のための薪集めを手伝い、貰った20円、クズ鉄集めで稼いだ50円、バナナを売って稼いだ20円、総計6万円を集めてくれた。自分たちは貧しくて、貰って当たり前と思っていた子供たちが与えるものに変えられた。与えるものを何も持たないほどの貧しい人はいないんだということを知った。

彼らはどうすべきか答えを知っている。厳しい状況の中でも、答えを生きるように変えられている。なぜ、どうしてと尋ね、何も起こらないのでなく、たとえ僅かでも、小さくても、「こうだ」という答えを生きている。それが、「それでも人生にイエスと言おう」と言って歩もうとする人間の在り方だと信じる。コイノニアの教育の実だと信じる。